

C 然我実成仏已来とは、壽量品所願の報中論三の報身仏であらねばならない「往昔の経文は末は応報二身の無始無終の願本を説いてゐない」との開目鈔の金言を信ずる限りに於て、壽量品の仏は、断じて、法中論三の法身仏ではない筈である。

D 迷盲学者の曰く、然我実の法身仏と然燈仏の始覺仏とに簡んで宝号とする所の、首題の五字即本尊である云々との如き邪見宗学は壽量神力の何処にも其証文を有してゐないのである。

E 「如是本尊在世五十余年無之」とは、如是き本化四大菩薩の脇士たる釈迦仏一尊本尊は、仏在世には無之し、但限八品のみ」であらねばならない「但限八品」とあるから八品儀相の曼荼羅即本尊とは何たる早合点の曲会私情なる事よ。己心の釈尊をば己心即釈尊だと誤解し、所化以て同体也をば、所化即本仏だと曲解し、一念三千の久成開顯と非情救済とを忘れて、単なる記小と有情のみの十界具足を以て壽量品所願の本体だと思ひ込んでゐる新旧日蓮門下宗は何とおめでたい教団であらう。(終り)

▽ + △▽ + △

小川泰堂居士に就て

小 崎 龍 雄

「山路よりやまちに暮れてけふもまた臥猪の床に宿せられまし」と旅を好んだ小川泰堂に、芭蕉や西行の面影がみられるが、居士が何故に旅人としての熱情を持ったかは実に日蓮上人を知りまた世に知らせようとすることにあったので、自らの安心を命よりか、曲林一斧、本迹合鑑、成仏道しるべ、撰折弁惑論、信仏報国論、教法万洲報布等に見られるやうに只々大法弘通にあったのである。

其は慶応元年十月十三日の聖日に完成された、高祖遺文録三十巻の最後の筆を擱くに、此冥薰大気なく海内に覆い、利生化物の春の花、普く四維に馨ばしく広流万年の秋の月遠く尽未来の闇を照さん、国土寧静にして四民安堵し万物各々其所を得て寂光為土の大利益を証せんことを深冀するのみ、泰堂考榮謹識とあるにみても窺へるのである。

藤沢の念仏門の家に生れ父孝栄天祐は遊行寺の檀林の教師でさえあった泰堂が、本化の教に浴したのは実に天保九年二月彼が二十五才の時、患家往診の途次たま／＼浅草蔵前の古本屋に、持妙法華問答鈔一冊を購ひ得たことが直

接の動機となつたのである。此は四十二年後の日並艸紙に「泰堂わかれりし時江戸村松町にすまい日々に市中の病者を廻診す、ある日藏前のさらし店に録内二十一の巻一冊をあがないえて、その夜灯下に一読し、又その次の日に富田屋惣兵衛のもとに計らずも録内録外全部を借り得て初めて日蓮大士の書を通読し、これ禪念仏等諸宗の遠く及ばざる仏法秘妙の極説なる事をさとり―本化独歩の法理を証得せんとしたいち」と述懐されて居るをみて明かである。

高祖遺文録に就ては、入信間もなく一心院日治、池上転成院日教、本国寺妙道院日妙等の師に就て教諭を受け、従来聖教、御書、祖書と呼んで伝承拝読されて居った御妙判の完全なる刊行もなく、誤謬錯雑多きを知るに及び、編纂校訂を思ひたつたのである。このために先づ聖祖の偉大さにうたれて増上寺観阿の四箇度宗論記に対し、曲林一斧を著して何ぞ観阿、唯誓の如き難を割るに手刀を用いんとの感慨を見せ、浅草雷門等の飯屋で大衆を相手に大いに宣布に努めて居たのが天保十一年十月二十五日旅装を整へ、同十三年二月まで第一回の聖跡巡拝、遺文対照の苦難の途についたのである。弘化二年八月二十九日父天眠の去に遇ふや、十五年間の江戸生活から墳墓の地藤沢茅場の笑宿庵に戻り、むしろ医業を傍として専心願業に精進したのであ

り、嘉永元年二月弟の周岳を伴つて尾張の本郷村に伊藤七兵衛を訪れ、智英院日明師の新撰祖書の借覧を申込んだが、一郷清信の俗子等相議して遺稿を守り、千計施すに術なしと、遺文録引にある如く、其の他外を防ぐ為に知人を介して写稿し、巻毎に写本を送らせたのである。勿論其の間「艸枕之記」「花の旅寝」「甲駿日記」「遺文録泰堂私記、全割記」等にある如く実地に見証し広く真偽を考覈し削除追補の研究の旅をも重ねたのである。このために江戸の人根本、藤懸両氏の資援も大きかったが財産の殆んどを費しあまつさへ「二人まで兄はうせはてゝ親は猶五十路の今日も、ものおもうかな」と歎じたごとく助手として或は将来大業の後継者と目して居た達次郎、革三郎の二人をも失なつたのであるが、遂に慶応元年十月十三日の五十二才に至る二十有七年間を要し「あはれたゞ仏もてらせ神もみよこのひとまきの心づくしを」の歌と共に、自ら云はれたごとく高祖遺文録三十巻は積年の間訂正校閲して我が精神既に尽きたりの感激裡に出来上つたのである。然も其の刊行に至つては明治十一年十二月二十五日玄題の下に「いくたびかたちかへりみむみな人のくるしきうみにしづむかぎりは」の辞世を残して六十五才笑宿庵に世を去る日までには刻成十六巻、未刻十四巻、故に枕頭に四男

周司を招き、此の稿本十四冊紛乱散失せば明玉の半碎如何にして此を全璧に複するの期あるべき我子我孫此残稿を奉持守護し假令顕貴の人威を以て逼るも、文学の師徳を以て誘ふとも一時披見の外必ず庵外不出を定則とし―これに遺戾して我が魂を泉下に痛哭せしむること勿れ、と厳に命じ漸く明治十三年十二月十四日大本三十巻、明治十九年十二月十一日活字本二十巻の大成を見たのである。

更に特筆大書すべきは慶応三年四月日蓮上人を当時尤もよく世に知らしめ今なほ読まれて居る「日蓮大士真実伝」五巻の労作である。行学朝師の元祖化導記、円妙澄師の註画讃、日省師の高祖伝、六牙潮師の本化別頭仏祖統記、建立、玄得師の高祖年譜等は相当広く用いられては居たが在俗の多数にまでは及ばなかったのを遺憾として前記藤懸与左エ門、根本源兵衛兩氏の特志を以て、挿絵を自ら考証下書して、長谷川雪提に画かしめ、全五冊本文二百六十二頁挿絵九十五葉からなり「此書は古往今来その御一代にかゝるべき書類を博く考へ集めて本化垂迹のはじめより宗門弘通の脉相、五百年前を今日こゝに見るが如く綴りなし、婦女童幼までもこの画を看此文を読て、随喜の心を發し信心増進の梯となさんとす」と伝凡例に記せるごとく、法身の舍利としての高祖遺文録の校訂と共に宗門史上忘るゝこ

との出来ぬ法勲である。

居士の事績に就ては到底限られた紙数に述べる訳にはいかぬが、其の専門の医術は勿論和漢学、書、画、茶、華道柔術、雅楽等往くとして可ならざるはなく其の道の奥義を究めて居り、郷土藤沢の發展にも大いに経綸を振い本年入寂八十年を迎へ神奈川県第貳部宗務所は藤沢市と共に其の報恩記念慶讃に、大いに力を入れやうとして居る次第である。

最後に居士の遺戒として「此書は萬法の大本、国家の柱石なれば教法遂に萬国に広布するの時節あり依て我れ此三十巻の枢要を取て一冊子となし此を洋文字に訳して早く海外に流布せしめん」並に死の前年四歳目録に「雄壮なりし昔を思へば數百の人を集合せしめて開筵講義し、手には遺文の稿を改めること三度に及び足跡殆んど扶桑に遍し今日何を羨み何を望まん―生きては生の仏、死しては死の仏たゞ一妙法に還歸して残余の日月を送る嗚呼楽しいかな」との泰堂居士の大抱負と、信仰とを加へて此の責を果そうとするものである。

（大会紀要として 昭和三二、八、二八記）